



新及如  
五石香日記  
三

5  
783



新  
門 783  
號 卷



首道法衣伝實記序

今も一あう法衣善室う後能く首道翁終  
馬の地き時うつうぬれも本はたらのひま宣と支  
女元身釋者曰人去境ぬ境者也と誨るる。ふ法衣  
湊川の史記に楠正成の戦死をゆする遺を詠ふ  
ぬ涙を隨きさる族ら志を我を志ぬ人るを花衣  
の後廳に首道翁の法衣の實記を見く涙も室  
泪を拭えさるる。世の月花を志ぬ人るを法衣  
田詠みそ比奈記のあまうあま傳ふあまこととけに風

粒の眞言といえさきひくくよま身先生の寫實  
うきうき生雁のさきまき池におうやうなう  
とぞうきまきうらまねうんこそまき生雁  
乃みどりまき草のまね松崎蛸沼次廣名力と  
風をのりさきいえず深住二十七日の晴の夜  
まにまき終り終いし西影のくまをれいし年の  
はといきまき終りまき今風花十月まきまき  
菊をまきあきまきうらまねの思儀まき二生位  
の園と縁とを感誦まき

文化七枝八月書

東肥 乞隠文曉識

翁及友

花巻日記

肥後代

僧文曉著

浪達

花巻菴奇淵校

九月廿百泥道の案内まき法如浮洲の茶店へ  
縁道志法ふ茶店のまきまき短冊松書まきお  
鳥下まきまき泥道まきまきまきまきまきまき  
回まきまきまき

所思

はらまきまきまきまきまきまき

翁

峽北島の木まきまきまき

泥道



お世ふ母方を流す御月 子母

此の大人御仙ありお記

惟此記

廿九廿之格亭子母之集まき約流りし一が敷打  
陰之重念之流し故うろとて何うて也序を散  
向おくらる

新ふ子母満るる母也まゝに 新

此物色筋波痛の事味めく世は四子のなる  
事の得る人と思いて奉仕の胃を流を流しとま  
け世を流るる悔の相の二口と押福をしが此身は

度敷重りて流母か子程とらるる母方惟  
然支者内議しといひまゝに流るるも相きつん  
とすけぬの師回家を志願する心ぬ流子とせり  
て業方如河のらん我性も本意するも何しもの有  
於るも本意を急ますべしとて流るるも相きつん  
味も流るるもまゝに流るるも相きつん  
流しと夫ら流るる人流しと流るるも相きつん  
つゝえしける流るるも母之流るるも相きつん  
七母も流るるも相きつん  
生不此あといひまゝに流るるも相きつん

有んを可成に在るの事其を  
 リ交りて其を数りて其を  
 飛りて其を数りて其を  
 一と花を移りて其を  
 十月とす

次郎長徳記

胃事庸睦止調井金経何中おを海の病を  
 を志す之道事いなりしよ  
 病氣ふり紙を出す且に在る  
 十月とす

次郎長徳記

扣帳 度入り  
 戊十月 号

- 一 根上御 一 硯一面 入小刀
- 一 烟多二口 入小刀 一 帚二枚
- 一 物具六枚 木綿 一 枕一枚
- 一 膳十人 拾精 一 竈三口
- 一 釜鍋 一 火箸三
- 一 茶瓶掛 二口 一 火鉢二口 真漆
- 一 茶碗 十 一 茶碗鉢 三口



傳書より清和の天皇の御事記に  
おしはるる御事記に云はる御事記に  
いふに平家朝臣の御事記に云はる  
御事記に云はる御事記に云はる  
御事記に云はる御事記に云はる  
御事記に云はる御事記に云はる  
御事記に云はる御事記に云はる  
御事記に云はる御事記に云はる

十月二日

惟然  
支考

去来抄

將お多急の本朝の御事記に

今叙之状を述ぶるに先ず御事記に  
前記の御事記に云はる御事記に  
御事記に云はる御事記に云はる  
御事記に云はる御事記に云はる  
御事記に云はる御事記に云はる  
御事記に云はる御事記に云はる  
御事記に云はる御事記に云はる  
御事記に云はる御事記に云はる

十月二日初子の

去来抄

惟然



狂はたけしむるにあらぬものなりしをいふも  
木部をよむるもたけしむるも伊勢へてきた  
元節をよむるも伊勢へてきた伊勢へてきた  
と狂状にあらぬものなりしをいふも  
とていふもあらぬものなりしをいふも

三日廿七日の伊勢へてきた伊勢へてきた  
とていふもあらぬものなりしをいふも  
伊勢へてきた伊勢へてきた伊勢へてきた  
伊勢へてきた伊勢へてきた伊勢へてきた  
伊勢へてきた伊勢へてきた伊勢へてきた

たけしむるにあらぬものなりしをいふも  
木部をよむるもたけしむるも伊勢へてきた  
元節をよむるも伊勢へてきた伊勢へてきた  
と狂状にあらぬものなりしをいふも  
とていふもあらぬものなりしをいふも  
伊勢へてきた伊勢へてきた伊勢へてきた  
伊勢へてきた伊勢へてきた伊勢へてきた  
伊勢へてきた伊勢へてきた伊勢へてきた

はまをきくもいしをくだりよにやみ能くおりの  
海舟あをふ何損き業の効徳いよとすんん  
事又信思を徳めく飛脚使中本をりよい  
は  
同言た子のめつと本をりまら二口出のあ人の徳  
中教着をしな方徳を思のあま二口あまの事  
徳のた運美徳を存徳もそこへよと事と抄  
旅を何ひは徳を論すま方運運酒を調合す

支考記

支考記

習彩本載りしきりよる五節解へ先すもる  
修所依りてをよる五同く色香十五付を元  
之をりよるを法して洗濯めをいし砂の石  
あすこの石を徳をすくく事あをは業子  
仙王あをる支を徳を以抱治郎共徳中も  
手之をさるをいよる金羅各母とまよる  
抄摩をあるる三十の徳をおよぶこと  
是れ重なり

支考記

五の朝犬草にありしをいよる事とす

途古し時候のあはれにやむる心はなほのまじりて朝令  
兵衛大満の訪ふ畫の海に松島船団又と五家来  
き外湯池に井塩を井味塩と外湯の千束の二  
十貫目龍氏中三束さうさゆをりし終るす湯ま湯  
二若さうお中らるる中なるおよぶ

今迄書所記

とる大満の信時きいしゆすおの念入麩三若お  
お徳青麻入終るさうさゆと睡地したものは白のめ  
しうさ事とらるるめしゆすおの念入麩のさ  
ゆしとらるる大井のゆりたしゆす

大堰川に遊ばせりて交るる

此のあまう字にいとれんと大井のあまもむら  
りていしゆすおの念入麩のさゆとらるる  
清徳やばすちりしゆすおの念入麩のさ  
ゆとらるるおの念入麩のさゆとらるる人のい  
んさいとらるる大井のゆりたしゆすおの念入  
りていしゆすおの念入麩のさゆとらるる  
とらるるおの念入麩のさゆとらるる  
とらるるおの念入麩のさゆとらるる  
とらるるおの念入麩のさゆとらるる  
とらるるおの念入麩のさゆとらるる

一 お支侍えとおもふに ぬらさるいんち 草流をうへ  
名匠のかくれを惜み及を主人に 給ふみこころは 徳  
向一章子とまやを辛く 苦しなまふり 痛抱の中は  
は青折風雅のほほ ことさるとと 進眼あるい  
何者ふよのむと 日東業のいんち せんか  
せむと 日東業のいんち せんか せんか  
うう せむと 日東業のいんち せんか せんか  
よ せむと 日東業のいんち せんか せんか  
さしを 目より入て 向の ぬらさを せんか せんか  
若きこころは これ 隠者の 一 儀を せんか せんか

お支侍えとおもふに ぬらさるいんち 草流をうへ  
名匠のかくれを惜み及を主人に 給ふみこころは 徳  
向一章子とまやを辛く 苦しなまふり 痛抱の中は  
は青折風雅のほほ ことさるとと 進眼あるい  
何者ふよのむと 日東業のいんち せんか せんか  
せむと 日東業のいんち せんか せんか  
うう せむと 日東業のいんち せんか せんか  
よ せむと 日東業のいんち せんか せんか  
さしを 目より入て 向の ぬらさを せんか せんか  
若きこころは これ 隠者の 一 儀を せんか せんか

お支侍えとおもふに ぬらさるいんち 草流をうへ  
名匠のかくれを惜み及を主人に 給ふみこころは 徳  
向一章子とまやを辛く 苦しなまふり 痛抱の中は  
は青折風雅のほほ ことさるとと 進眼あるい  
何者ふよのむと 日東業のいんち せんか せんか  
せむと 日東業のいんち せんか せんか  
うう せむと 日東業のいんち せんか せんか  
よ せむと 日東業のいんち せんか せんか  
さしを 目より入て 向の ぬらさを せんか せんか  
若きこころは これ 隠者の 一 儀を せんか せんか



の心せしむ調と業平うろ織さうり  
まもてあが子あとおあひあめくゆふにせし  
すうきつていひまゝあひまゝ息（口）え  
いと（き）あひまゝいけりていひあはるとうりあはす  
又茶をすめをそそぎまう後ふ各茶をそそぎ  
おれをそそぐ

惟然記

八日天氣快晴はるをいひ（口）すあめ（口）土まゝに信流  
らと流息とそはあめをそそぐ河辺江の角上  
に使茶を人のけり子のからそそぐのてあそふ

後を初りせしむんとて信を大の形に在りて人  
をそそぐとそまゝいひおくれん（口）各茶をそそぐとそ  
道中へは新（口）蘭茶をそそぐ杉林まゝ方へ祝詞  
をたのまゝなく納りあゝおくれん（口）各茶

茶納

後つまやうろあめしと神あつてん 木茶  
初言をやうそいひいひ信太のむち 正茶  
峠上り野のさきまゆ法まゝいひ 大茶  
記さうそ初りもろれ（口）き湯はあひ 支茶  
あ仙や使子つてまゝく麻えまゝ 正茶

古河舟をいさみつたに梨鷹のうり目 かな  
何かろふ竹のそやしやいそささい 性死  
神のそなたのこころや 松の風 之石  
りさきと見まはるる雲のふか じお  
あつしのかさふあすや 鶴のこころ 去来  
大船の帆舟をりまはるるに比無下を海を隠れ中りり  
亦亦去来の中りたるに船中暇を伺え中りり  
氣力も衰ふあつては縁神をりし昔の辰浦より起  
え世海あきども根元脚時の名もと大船は痼疾なり故  
逆逸はるる才なり信又加減して心をあきらむるも去来力を

らに歌とは活法を他賢よりとてめへおる去来師まよ  
うに沙白木音が中条尤おきもいふなる仙舟のそ虎口龍  
鱗を醫にりも下り来り人かえん我が悟りたはれは秋呼吸  
は通はるる言はつても本音が神力を得て他を求ふ心た  
しまふもいなる心法道行人の心も死せるも死し  
去来してお等去来はいつてもやまれば去来心切て病床の  
機嫌をもちらしてP ぬ云去来とる鴨居のつふ海ふく  
大船は辞世おきつるの名匠の辞世にちりしやと世にいふも  
のいふもあつて一句を油をぬはる語門人か語道は解し  
海の云きのふの世は句はきふの辞世はりの後句はあきの辞世を







去来記

十日浦田より沙野のながより浦敷をぬいでいし浦野に  
ぬりおろしし浦書ゆりてせりたる也はる中し木衣  
古の浦田より浦書ゆりてせりたる也はる中し木衣  
すみまをたにわきまをたにわきまをたにわきまをたに  
れをわきまをたにわきまをたにわきまをたにわきまを  
やいぬふ木衣を脾胃うらうらやぬし強弱進まぬりて  
ら申つて刻よいつて人こおつきかたふ合つて一人も合  
たすものか

惟徳記

十日浦田より沙野のながより浦敷をぬいでいし浦野に  
ぬりおろしし浦書ゆりてせりたる也はる中し木衣  
古の浦田より浦書ゆりてせりたる也はる中し木衣  
すみまをたにわきまをたにわきまをたにわきまをたに  
れをわきまをたにわきまをたにわきまをたにわきまを  
やいぬふ木衣を脾胃うらうらやぬし強弱進まぬりて  
ら申つて刻よいつて人こおつきかたふ合つて一人も合  
たすものか









此を日没と云ふなり

大坂に陣より来た惟統可一は伊豆の状遣漢との原野勢  
も各月おと集りしとに陣よりあらせられは是等事いふ物  
みつかりしと云ふ原野を良と看たり日より痢疾を患わ  
るにやむと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野  
の人づかすつと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野  
もわが守りし原野を良と看たり日より痢疾を患わ  
るもつと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野  
着せり云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野

今の地方を以て見れば  
はとちかりしと云ふ  
仲を以て依りあつた  
山に十三峰と云ふ  
ありしと云ふ事なき  
れたらぬと云ふ事

よりり相と事由考つたこと及び大坂の帯解まてた  
をききしと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野  
申と概灯も消ぬと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野  
と云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野  
坂まてたと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野  
陣と依りあつたと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野  
うすゆけむと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野  
何うなりしと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野  
人と云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野  
らんと云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なきに於て伊豆上野





此篇之文何れ毎月は神々しくさまたるを感はるるもその  
是れ相も希世の何う何うに生れしものなき之矣柳の港の  
よきよきも杜ノのを先のは胸をきり涙を流す

支考記

引首寸考法

雪月魁魁 風在精神 子尔可驚動人  
天鳴呼奇哉 芭蕉妙哉 芭蕉萬里日  
雲一輪明月五十年一字不說

各松香

文章	其角	去来	李由	曲翠	正秀
木節	乙州	卧高	惟佳	昌房	探也
泥豆	之道	芝柏	北玄	尚白	土芳
皇依	許六	丹野	風國	野童	施力
野明	角上	胡故	蘇葉	雪椿	素馨
回身	萬里	娥々	這翠	荒雀	梵江
木枝	朴吹	魚光	支考		

諸國代香記

右の外直江中は中々在るに亦方坂夏流に在る仔細は外  
玉台より一草一木も此より取らざる人々之を在る過の縁



取事在後太之通之れを此中より力取  
り申れ也

十月十日

桃吉直

松尾半右衛門

新花八路骨と作之也

此後廿五年十月十日 具生字

翁及村上畢

